

二六九一番

かにかくに 物は思はじ 朝露の 我が身一つは
君がまにまに

二六九二番

夕凝りの 霜置きにけり 朝戸出に いたくし踏
みて 人に知らゆな

二六九三番

かくばかり 恋ひつつあらずは 朝に日に 妹が
踏むらむ 土にあらましを

二六九四番

あしひきの 山鳥の尾の 一峰越え 一目見し児
に 恋ふべきものか